

## 今後の検討課題

球根ベゴニアの植物体は内生菌汚染が著しく(竹内ら、1979)、このため、組織培養においては継代を早く行わなくてはならない。中山(1986)は、球根ベゴニアの内生菌に対して、硝酸銀溶液浸漬による殺菌が有効であると報告している。本園でも、硝酸銀溶液に葉柄を浸漬してみたが、葉身部まで吸い上げられなかったためか、完全に殺菌することはできなかった。今後も殺菌方法について検討したい。また現在、茎頂付近や若い花梗などを外植体として培養しているところであるが、内生菌にかなり汚染されていることが分かっている。

次に、これまでの観察結果から、順化に移すときの植物体は、シュート長が少なくとも4~5cmほどに生長していないと枯死しやすいことが分かっている。しかし、このような植物は順化に成功して開花に至っても、茎の基部が細く、

花もやや小さくなるなど、品質の面からみて若干劣るものであった。そのため、生育のより初期の段階から順化に移す方法や *in vitro* で球根形成を図り、外的環境下で球根から催芽させて栽培する方法を今後検討したい。

## 謝辞

本試験を遂行するにあたり、元信州大学農学部教授中山昌明氏のご指導、ご助言を得ました。ここに深く感謝の意を表します。

## 引用文献

- 土井 環、谷口研至、近藤勝彦、橋本清美、1992。苗木原基法を用いた球根ベゴニアの組織培養。広島市植物公園紀要14:51-59。
- 中山昌明、1986。組織培養による花卉の繁殖。p123-125。篠原 昭、田中一行、白井汪芳編著。バイオテクノロジー入門。培風館。
- 竹内正幸、石原愛也、古谷 力、1979。新植物組織培養。朝倉書店。p221。

## ヤエヤマヒルギ・オヒルギの開花について

平井健一郎・柴田 昌男・世羅 徹哉

大温室内丸池に植栽しているヤエヤマヒルギ及び栽培温室で鉢栽培しているオヒルギの開花について報告する。

### 1. ヤエヤマヒルギ

#### *Rhizophora mucronata* (ヒルギ科)

ヤエヤマヒルギは、1990年10月に導入されたものであるが(広島市植物公園栽培記録第13号参照)、1997年に初めて開花した。栽培場所は導入時と同じ大温室内丸池で、年間最低気温15℃、丸池内の水温は20~30℃で、植え鉢内の水位が下がった場合は井戸水を補給した。1997年8月中旬頃から開花しはじめ、12月現在まだ多くの蕾が見られる。蕾から開花まではかなりの時間を要し、花は樹高2.4m~4.1mの幹の頂芽付近を中心に葉腋から約2cmの花柄を伸ばし、先端で分岐して1~2花を下向きに付けた。花

弁は白色4弁、やや肉厚で外側へ反り、内側の縁に沿って綿状の毛を有する。萼はクリーム色



ヤエヤマヒルギの花

で4裂し、非常に肉厚で固い。葯は8本、薄こげ茶色で三角錐状。1花の寿命は短く約1週間で、4花弁と雄しべが脱落する。現在最も大きな子房で直径15mmであるが、まだ発芽は確認されない。

### 2. オヒルギ

#### *Bruguiera conjugata* (ヒルギ科)

1987年10月に実生苗を導入したもので、最低気温13℃のガラス温室内で、直径20cmのプラスチック鉢に赤玉土と腐葉土で植え込み、常に腰

水状態で管理した。開花した株は樹高80cm、頂芽付近に3個の蕾を付け、そのうちの1花が1997年11月13日に開花した。葉腋から約1.5cmの花柄を伸ばし、長さ3cm、花径2.5cmの花が下向きに咲いた。10花弁、10萼片をもち、外側は赤～淡紅色を呈する。花弁はクリーム～オレンジ色で、内側の縁には毛がある。葯は1花弁に対し2本有り、鞘状になった花弁が開くと同時にその中に覆われていた葯がはじけ、花粉を飛ばす。1花の寿命は18日であった。



オヒルギの花

## ダーリングトニアの開花について (*Darlingtonia californica* Torr.)

原 田 尋 美

本種はサラセニア科に属し、1属1種の多年生の食虫植物で、アメリカ合衆国のカリフォルニア州北部とオレゴン州西部にのみ自生している。自生地は低地から標高2,800mにかけての傾斜地に点在する湿地で、多量の湧水によって地温が1年中低く保たれている。このため夏の暑さを嫌い、日本での栽培は難しい。別名コブラプラントとも呼ばれるとおり、ヘビが鎌首をもたげたような形をしている。自生地では捕虫葉の長さが1mにもなるが、栽培品では30～40cm程度である。当園では、夏期15～20℃、冬期13～25℃に室温を調節し、50%程度遮光したガラス温室内で6株栽培している。これまでも花芽が確認されたことはあるが、開花に至らなかった。今回初めて開花し、花の細部を観察できたので記録する。

開花した株は、20cm×30cmの発泡スチロール箱に水苔で植え付けたもので、捕虫葉の長さは25～30cm、現在当園で栽培しているなかで最も大きな株であった。花茎を伸ばしたのは1997年4月で、5月20日ごろ開花した。6月2日に受粉を試みたが、花粉を確認することはできず、その後結実することもなかった。

花茎の長さは約55cm、一花を頂生した。花は

下向きに開き、直径約4cm。萼片は5枚、長さは約2.5cmでやや緑がかった黄色。花弁は5枚で長さ約1.5cm、濃い赤茶色で黒っぽい縞が入っている。花弁はほとんど開かず花柱を包んでいた。

同科のサラセニア属では花柱が傘のような独特の形状をしている(図1)が、ダーリングトニアではそのような特徴的な構造は見られなかった(図2)。

開花後も順調に生育を続け、1997年11月上旬には、花芽と思われる5cm程度の新芽が確認されている。来春の開花をめざして観察を続けたい。

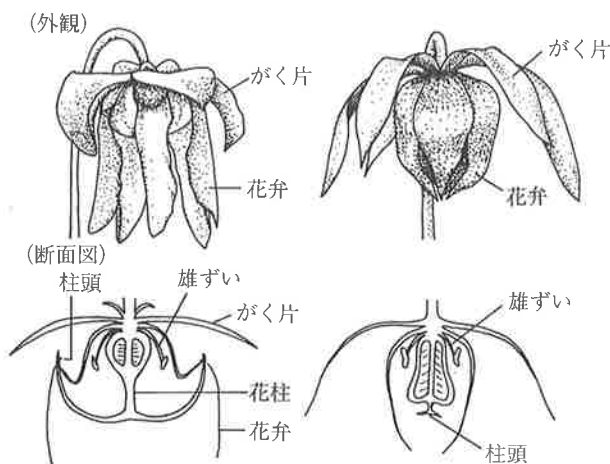


図1 サラセニア・フラバの花 図2 ダーリングトニアの花